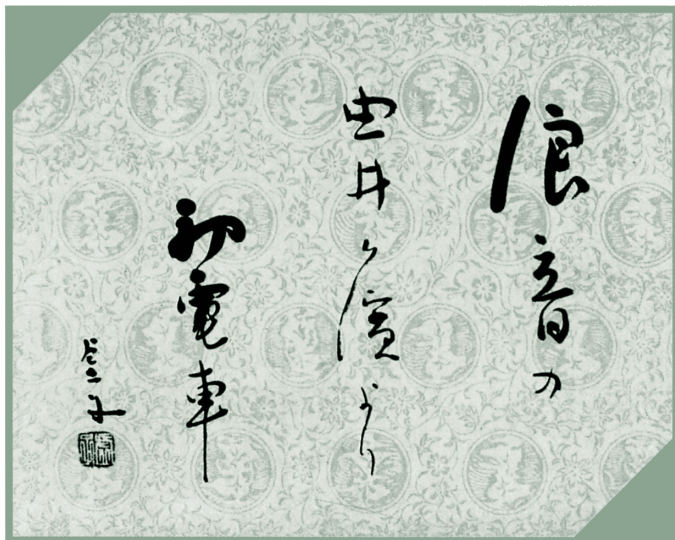


詠風集

十月号



花鳥諷詠®

令和2年10月 ■ 第391号 ————— 目次



花鳥諷詠選集	稲畑廣太郎	2
	駒形 隼男	4

第十六回国際俳句シンポジウム	7
----------------------	---

虚子研究 『六百五十句』 研究 (10)	12
----------------------------	----

虚子研究 虚子宛書簡を読む (十五)

明治二十四年五月二十九日碧梧桐書簡(封書)	椋 則子	18
-----------------------------	------------	----

一頁の鑑賞	池田雅かず	24
	吉田 有子	25

この人の作品	西村 セツ	26
--------------	-------------	----

新刊紹介	27
------------	----

カレンダーこぼれ話①	28
------------------	----

地区行事開催日程表	31
-----------------	----

編集後記	32
------------	----

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

稲畑廣太郎選

特選五句

手花火の終の一本子に渡し

松江 森木 八潮

地球てふ星の突起を行く登山

伊賀 池本 準一

惜春の日々を刻みてシュレツダー

下関 貞包 清子

雨止んで帰りを急ぐかたつぶり

福岡 森 順子

川音も削り込まれてかき氷

糸島 宮脇 睦子

二句短評

一句目——線香花火やロケット花火等色々な種類のあ
る手花火は家族や友人誰でも楽しめるものである。こ
ちらは家族を想像するが、楽しんでいた手花火も最後
の一本となってしまう。それを子供に渡した親の優
しさが仄々と伝わってくる句である。

二句目——登山の句といえ、地上から山へ向かって
登る下から上への視点の句が多いが、何かこの句は宇
宙から地球という星を下に見ているという何ともダイ
ナミックな景で、反対に山を単なる「突起」と表現し
て不思議な魅力ある句となった。

入選六十句

蜘蛛の子の採み合ひながら生れけり

浜松 大庭よりえ

それ以上大きくなれず滴れる

荒尾 大川内みのる

地ビールと聞けば素通り出来ぬ旅

神戸 上岡あきら

諦めし頃に大きな鮎掛る

高知 沢田 佳代

一水の影絵写し絵花菖蒲

砺波 田上真知子

比奈夫亡く回す鉾無く東山

枚方 中嶋 陽太

波打ちて毛虫の急ぐ斃

熊本 井芹真一郎

六畳を使ひ切り足る昼寝かな

松山 門田 安世

雲の峰六甲山を踏み台に

河内長野 橋本 佐智

生きてゆく為の涼しき距離として

糸島 春田美智子

スマッシュの決まりて汗の顔ゆるむ

高知 河野 紅柳

天地の恵みアスパラガスの青

北海道 高橋まさし

女王花咲いてそはそはしてきたる

高槻 林 曜子

明易の遺影は壁にちよと歪み

八王子 小町谷滋子

緑蔭の石へすとんと鳥一羽

鳥取 山本 和子

まだ叶ふ夫の運転風薫る 福山 箱田富久恵
 眼鏡無き一と日の見えぬこと涼し 伊万里 大久保花舟
 海からの風のもてなし夏座敷 福山 岡崎 鈴
 短夜やナースコールに命継ぐ 神戸 岩水ひとみ
 羅の静かな風にすれちがふ 京都 本谷眞治郎
 蔑切の鳴き止む時もありにけり 白岡 小林カヨ子
 その一語打ち消すやうに髪洗ふ 北九州 元田 品子
 もう登山する気なけれど見て親し 島根 服部 康人
 角すこしとれし二人の冷奴 西予 末光恵美子
 端居して田の面の風の声を聞く 名張 寺嶋弥生子
 退屈な時間を埋めて草を引く 札幌 菅原ツヤ子
 静けさの張りつめてゐる蟻地獄 福山 来山 静子
 夜の秋五分遅れの鳩時計 泉大津 山田 佳音
 湖風に小さき音生れ小判草 高島 貫野 浩
 舞台はね余韻と帰る白日傘 福岡 梶原 敏子

病葉や大樹の風に諾へり 高松 鍋田 佳
 思ふこと余りに多く明易し 福岡 下原口允子
 天に星地に一面の姫蛭 菊池 川口 二子
 炎天下ぐんぐん道の延びにけり 春日部 吉川あかし
 青空を叩いて実梅落としけり 太宰府 川路 泰子
 灰色の空濡れながら虹かかる 高松 荒井多美枝
 朝霧を衝き難産の牛を診に 北海道 安田 豆作
 竜神のあらはれさうなはたたがみ 茅ヶ崎 中込 陽子
 草茂る視界さへぎる川の音 伊賀 光岡代里子
 今日灯を消しぬ守宮の厨窓 大分 橋本 照子
 山風の乗せ来るこだまほととぎす 大牟田 鹿子生憲二
 沈黙を繕ふソーダ水の泡 神戸 涌羅 由美
 外出の叶ひし日焼なりしかな 福知山 松山ひとし
 どこからか小犬のワルツ梅雨晴間 高松 渡部 全子
 褒め上手なる一と言に励む汗 四日市 丹羽みどり

● 駒形隼男 選

特選五句

地ビールと聞けば素通り出来ぬ旅

神戸上岡 あきら

雨戸繰る音に始まる梅雨じめり

成田阿部 ひろし

ひたすらに泥搔くボランティアの汗

神戸池田 雅かず

朝霧を衝き難産の牛を診に

北海道安田 豆作

崩れゆく時薔薇の香の匂ひ立つ

高松肥塚 英子

二句短評

一句目——親しい仲間との旅であろうか。時間に追われ名所旧跡を巡る観光ツアーではない。組んである旅程を臨機応変に、旅先でのハプニングを楽しんでいる様子を地ビールに託して詠んだ。旅の楽しみとは、本来かくあるべきと思う。

二句目——古い木造住宅は、梅雨時にはいろいろ不都合が生じやすい。雨の朝、木製雨戸は湿気で軋みスムーズに開かない。「梅雨じめり」の語に、梅雨への作者の不安な思いが込められている。

明易や夢の亡き夫振り向かず 堺 田宮美千代

梅雨空の高さ覚えて鳶の笛 小諸 丸山 ま美

サングラスとり本当の海を見る 習志野 大慈弥爽子

タオルごと受け取る天使天瓜粉 奈良 三谷 啓子

海開父を育みたる渚 島原 八木 花栗

風に息ととのへてゐる糸とんぼ 井原 平 春陽子

細りたる項あらはに更衣 高知 西込 とき

庭の草伸びる速さを見て端居 金沢 矢木 桂子

咲ききつて水の膨らむ水中花 熱海 西島ちはる

言の葉の隅に貼り付く梅雨じめり 浜田 三浦 健一

一等を目指す闘志の子の日焼 倉敷 江原由美子

真実を少し歪めてサングラス 高松 真鍋 孝子

空向いて交はず言葉やハンモック 神戸 豊辺 靖子

濡るるまで星と語りて髪洗ふ 大牟田 介弘 紀子

ごきぶりを打ちそこねたる虚ろかな 井原 片山 千代

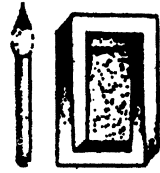
入選六十句

青田風切つて卒寿のペダル漕ぐ 加吉川 渡辺しま子
 青鷺の濁声響く夜の静寂 島原 吉田 章子
 旅便り添へて届きしさくらんぼ 大分 野村香代子
 三密を避け再開の句座涼し 筑紫野 多田 蒼生
 水昏れていよいよ白し半夏生 横浜 久保 理江
 それとなく緑蔭の椅子空くを待つ 君津 榎本 静江
 車窓の灯涼しく流れゆく帰心 白山 大橋美代子
 比奈夫亡く回す鉾無く東山 枚方 中嶋 陽太
 夕風に色薫らせて花櫓 西宮 宮本 露子
 師の句集ひもとき悼む夜半の秋 長岡 安井 里子
 網戸より暮しの音のあらはなる 平川 丹野 慶子
 降る音の先づは小さく梅雨に入る 久留米 黒田 充女
 黴の香の書に追憶の日々捲る 鹿児島 平山 洋子
 水郷の空を広げて雪加飛ぶ 福岡 西村 芳山
 心経の墨の滲める滝行衣 京都 森 孝子

サングラスするには惜しき海の藍 浜田 田中由紀子
 昼寝覚め夢に忘れて来し一句 郡山 濱名 伸子
 待つことに馴れし約束星涼し 伊賀 永井二紗子
 短夜やナースコールに命継ぐ 神戸 岩水ひとみ
 浜木綿や赦免の沙汰なき流人墓 高知 坂本喜代子
 まだ空の高さを知らず燕の子 野洲 小泉 悦代
 梅雨じめり込めて寺苑の鬱蒼と 白山 西 登美枝
 その一語打ち消すやうに髪洗ふ 北九州 元田 品子
 蓮開く音を待ちあるしづこころ 茨木 田邊 育子
 母の手を解き蛭に導かれ 山口 椿 壽子
 思ひ出を拾ひ読みする曝書かな 神戸 塩見 成子
 花合歓に始まる旅の車窓かな 鎌倉 緒方 初美
 退屈な時間を埋めて草を引く 札幌 菅原ツヤ子
 夕立を楽しむやうに子の帰宅 神戸 田中 良子
 静けさの張りつめてゐる蟻地獄 福山 来山 静子

海光へ子亀ひたすらなる歩み 高知 前田まこと
 継がれゆく親子の夢や鯉幟 うきは 金子 清黙
 夕映えの名残のやうに月見草 藤井寺 中村 佳子
 潮騒の浜木綿ゆらす夕べかな 宇部 縄田 悦子
 郭公の次の一声待つ静寂 東久留 須藤重希子
 ぎこちなく稚抱く父の汗滂沱 奈良 和田 富子
 青空を叩いて実梅落としけり 太宰府 川路 泰子
 管理棟夜どほし灯し出水告ぐ 加古川 瀧 積子
 今日灯を消しぬ守宮の厨窓 大分 橋本 照子
 沖繩の慰霊の日なり梯梧散る 兵庫 今地千鶴子
 海開せぬ湘南の海の黙 横浜 村田まち子
 連なりて跳ねる小鯖の光釣る 四日市 伊藤 和子
 沈黙を繕ふソーダ水の泡 神戸 涌羅 由美
 山梔子の雨を弾いてゐる香り 福山 杉原 芳子
 人目気にしつつ術後のサングラス 長岡 桑原 幸子

千仏の千灯暗し梅雨の堂 木津川 松山 寿美
 遺されし友の俳磚露涼し 神戸 森岡喜恵子
 雨脚の音となりゆく浮葉かな 袋井 湖東 紀子
 水牢となりし我が家の梅雨出水 大牟田 石橋 武子
 夏の雲押し上げてゐる近江富士 草津 竹内 恵子
 虚子俳話膝にのせたる端居かな 小樽 岩崎スイ子
 風に息ととのへてゐる糸とんぼ 井原 平 春陽子
 あとひとつつまむのは誰さくらんぼ 東京 小作 紀子
 抜き襟は母の手ほどき初浴衣 福島 伊藤とし子
 火照りまだ残る夜風や月見草 福岡 工藤 友子
 一等を目指す闘志の子の日焼 倉敷 江原由美子
 白球を見遣る喚声雲の峰 神戸 岸本とし雄
 罅割れし田を潤ほして喜雨至る 我孫子 柳沢いわを
 白髪をお洒落に隠す夏帽子 福山 楨岡 弘恵
 濡るるまで星と語りて髪洗ふ 大牟田 介弘 紀子



編集後記

句を作り或は菊の酒を酌み

虚子

菊酒は陰暦九月九日、重陽の節句に飲む、菊の花を浸した日本酒のこと。『虚子編新歳時記』では重陽の傍題になっていますが、重陽の句はありません。虚子の時代には既にすたれてしまった宴ですが、この日に「菊酒」を飲み、厄除けや長寿を祈願したそうです。今年はぜひ宴を開きたい、たとえば心の中だけであっても。

今月の花鳥諷詠選は、稲畑汀子会長が体調不良のため急遽稲畑廣太郎常務理事に選をお願いいたしました。快く、然も迅速に選をしていただいた廣太郎先生に感謝です。会長の体調も日々よくなっていると伺っています。一日も早い全快をお祈りしております。

先月より募集を始めた第三十二回日本伝統俳句協会賞ですが、前年の第三十一回の表彰式は、残念ながら、本年度の開催を断念いたしました。受賞者の皆様には賞状のみ送付いたしましたことをご報告いたします。来年の六月の総会時には二年分の受賞者に壇上へ上がっていただきたいと考えております。ぜひ多くのご応募をお待ちしています。

相変わらず、事務局は少人数で運営しておりますので、別の電話に出ています。

で受けることが出来ないことがございますことお詫びいたします。俳句や機関誌へのご質問やご意見は、投句はがきの読者の声をはじめ、書面にいただけると幸甚です。その際、ご住所とお名前をご明記いただけますようお願いいたします。

(須川)

花鳥諷詠十月号(通巻第三九一号)

定価二五〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和二年十月一日

発行人 稲畑汀子

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚二-18-9

シャンブル笹塚二-B-10-1

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム㈱

〒112-0014 東京都文京区関口一-19-12